

学問の世界では、しよせん雑兵足輕のたぐいであろうと自分のことを自覚している。小身者だから身が軽い。年来、いろんな分野を駆けめぐってきた。若年にして早くも高雅な緋緘の鎧かぶとに身を固め、自陣から一步も動かぬなどというのは、どうやら私の性分に合わないようだ。

大学の卒業論文はモーパッサンだった。理由は簡単だ。大学に入ってやっと身につけたフランス語という武器を、できるだけ鋭利にときすまそうというのが、その目的だった。それに貧乏書生の悲しさ、自分で原書・参考書を買集めるだけの金銭的余裕にめぐまれません、いささか季節はずれの誰もあまり読みたがらぬこの作家の本を、せつせと大学の図書室から借りだして読んでまでのことである。しかしおかげで、周囲の友人・後輩諸君のように世間からスタンダリヤン、バルザシヤンとして立てられる機会には、一生のがしてしまった。

大学院・修士コースのころは、少し時代をさかのぼって、主として十九世紀前半の心理小説ばかり読んでいた。やはり年ごろ

だったのであろう。どうにも異性というものが理解しがたく、だからもっぱら小説相手に恋愛心理などを研究していたのである。バンジャマン・コンスタンの『アドルフ』をテーマにした論文で修士号を取得し、ついではそのころまだ日本ではあまり



私の研究  
心理小説から  
ヌーボー・ロマンまで  
沢田 閏

問題にする人もなかったジョルジュ・プーレの方法論を援用して、シャトーブリアンの小説『ルネ』に関する形而上学的な分析を試みて学会に報告した。

ドクター・コースに移ったころは、同人雑誌(VIKING)に詩を書いていたの内で、自分なりのやり方で詩というものの内

的なうごきを探索したいと考え、ヴァレリーの『シャルム』の若干の詩篇を解釈してみたりしている。これが、大学院の博士課程をおえるときの研究発表になった。

一方では、三十一年秋ごろから、恩師・生島遼一先生のご指導による「バルザックを読む会」に入れてもらって六年間そのおつきあいをしていたし、そのうち、今度は自分で生田耕作氏や島田尚一君をかたらって「ヌーボーの会」というものの例会を毎月ひらいてきた。後者は、ヨーロッパ・アメリカの二十世紀の小説を気楽な気持ちで読み、カンカンガクガクの議論を戦わせようという趣旨の会である。その関係で、昨秋、フランスのヌーボー・ロマンのミシェル・ビュートル氏と大いに欲談する機会が得られた。

まだまだほかにも、いろんな問題、いろんな作家にぶつかってはきたが、しかしこちらでそろそろ、めでたき合戦にであい、みごと侍大将ぐらいいは出世したいとひそかに考えるのであるが、さてどういふことになるだろうか。(文学部助教・フランス語)